

## 創業者と人間・松下幸之助

### — 人を育て、人を創る人間リーダーの語らい —

水 元 昇

#### はじめに

皆さん、こんにちは。本日は大変にありがとうございます。

今日は、「創業者と人間・松下幸之助 — 人を育て、人を創る人間リーダーの語らい—」と題してお話をさせていただきます。まず、このテーマについて、私と幸之助の出会いから話をしてみたいと思います。と言いましても、もちろん直接の出会いがあったというわけではありません。

最初は活動報告的になるかもしれませんが、お聞きいただきたいと思います。

なお、本来はすべて「松下幸之助氏」としなければならぬところですが、私自身学術的にも論文では「幸之助」と呼ぶことに慣れてきましたし、公人として、また、親しみも込めてここではすべて「松下幸之助」「幸之助」と呼ばせていただくことを最初にお断りさせていただきます。

松下幸之助といえば、ある年代からうえの人にとっては幸之助の名前を知らない人はいないと思います。戦後の日本経済を立て直した人物の1人として、あまりにも有名な人。生きていれば109歳。1989年に94歳で亡くなりましたが、20世紀の戦後日本の代表的な経営者の1人です。幸之助一代で松下電器を創業し、今日の松下グループとして発展しました。世界の松下となっている、ナショナル・パナソニックというブランドは有名です。幸之助は、立志伝中の人物というだけでなく、その経営哲学は日本のみならず世界中から注目され、20世紀が生んだ経営者としては一流の生き方をした人物といわれています。中には、「経営の神様」と評する人までいるぐらいです。

私は創価学園・大学の4期生です。私が一番初めに創業者と幸之助の出会いを知ったのは、創価大学4年生のころです。私は故郷の福岡で友人と共に、当時、松下電送の会長であった木野親之さんが体験談として、感動的に語られた「幸之助と創業者の出会い」を聞いた時でした。これほどまでに創業者を慕う幸之助の素直な心に感動しました。

友人と2人で感動して、「我々も頑張ろう」と決意したことを覚えています。

私はその後、大学院へ進み、苦勞を乗り越えて短大の教員として教鞭をとらせていただくことになりました。その中で一貫して日本の経営システムについての研究を進めてきました。ちょうど10年ぐらいたった時、一つの決意をしました。それは、創業者が創価大学に与えられたテーマの一つである、「人間主義経営」ということに挑戦したいということでした。その意味で、「人間主義と企業経営」というテーマを私のライフワークに決めました。

しかし、何から手をつけていいかわかりません。その時、私が最初に選んだのが、実は「松下幸之助」研究でした。短大生と共に1年間、皆で必死に研究しました。その時、関西にある

松下資料館や松下電池工場などに行き、そこでさまざまな方々にもお会いし、幸之助の理念が実際に息づいているのかも研究しました。その中で最も感動的だったのは、松下電池工場のある女性従業員の素直な言葉でした。彼女は、「会社の中でいろんな悩みを抱えてきましたが、幸之助の哲学を学ぶにつれて、一番大事なことは自分自身が変わることだと気づきました。悩みを克服するには3つしかありません。1つは上司や周囲に変わってもらうこと。もう1つは逃げてしまうこと。そして、3つ目は自分が変わることです。その中で、一番簡単で実現可能なのは、自分を変えることだと気づきました。そのことに気づいて実践し始めると、自分も軽くなり、のびのびと仕事に人生に取り組めるようになりました。また、職場も明るくなりました」と語られたのです。まるで短大生の心とまったく同じなのです。堂々と語る女性従業員の姿に、幸之助の哲学とは、まさに「人間革命」の哲学そのものだと気づかされました。

その時、短大生が必死でまとめた卒業論文集を、松下資料館の方へ御礼としてお届けしたところ、実は、資料館の方から、「松下グループの社長会で、みなさんの素晴らしい研究の成果を紹介しましたよ」と言われたのです。卒業論文集をわざわざ紹介して下さい、今、松下資料館に置いていただいております。

今回、創価教育研究センターの取り組みの一つとして、創業者研究に本格的に取り組むことになりました。そこで、私のできるテーマを考えた時、何としても「創業者と幸之助の歴史を残したい」と決意をしました。

それで、まず全体像をつかみ、真実の歴史を残せるように、私はこの夏、関西の松下資料館、創業者との語らいの舞台の一つでもあった関西学園、そして、当時、その出会いに関わられた方々にお話を伺うことから始めました。木野親之さんにもお会いしてきました。特に、木野さんは創業者と幸之助の橋渡し役として、ほとんどの語らいに参加された方です。木野さんは大阪大学在学中に、幸之助を慕い、松下電器に飛び込みました。その後、信仰と出会い、一生を経営では松下幸之助を、そして、人生では創業者を師と仰いで生き抜いてこられた方です。木野さんの著書に、『松下幸之助 叱られ問答』『幸之助の教え 人力車は消えず』がありまして、この本を読むと、いろんな事がよく分かってきます。最近、一時健康を損なわれ大変な状況でしたが、今は元気になり、「幸之助の理念と創業者の理念を語り継ぐ」との決意に燃えて、忙しい日々を送っておられます。

また、今回の調査の中で、幸之助が戦前、一番初期に作った教育機関である店員養成所の1期生でもあり、ずっと幸之助の下で、また、創業者を師と仰ぎながら、定年後、80歳まで企業教育を通して社会貢献をされてきた新屋純之輔さんにも出会いました。牧口先生が提唱されていた半日学校制度が実は、当時、幸之助の作った学校の考え方とまったく同じであったことに注目され、それを何とか立証したいとの万感の決意を語って下さいました。

当時、幸之助の自宅秘書であった松下資料館の支配人の御紹介で、往復書簡を交わされた際に、PHP研究所の研究部長として実際に関わられた方にもお話を伺うことができました。そして、最近には、ずっと秘書として幸之助と創業者の出会いをすべて見てこられた方にも話をお伺いすることができました。すべてが感動の連続でした。

今回のお話で伝えたいことは山ほどたくさんあるのですが、私の研究もまだこれからですし、何とか纏めたいと思っていますが、そのスタートとして、今日は「創業者が幸之助氏について語られていること」を中心に、当時のエピソードなどを交えてお話をさせていただきたいと思っております。

## 1. 松下幸之助について

前置きが長くなりましたが、まず、松下幸之助氏について簡単に述べて見たいと思います。短大生に聞いたところ、「名前は知っていても、ほとんど何をした人かは分かっていない」という学生がたくさんいました。幸之助が亡くなってから15年も経つと、若い世代ではほとんど知らない人も増えてきています。今日、お集まりになった皆様は、もちろんそんなことはないと思いますが、いかがでしょうか。

先ほど、紹介したように、「幸之助」と呼び捨てにされるほど皆さんの心に残った人です。「経営の神様」などとも呼ばれていますが、その人間的な魅力と経営理念の素晴らしさには、日本だけでなく世界から高い評価を得ています。かつて、大手新聞社が実施したアンケートでは、日本人の人気ナンバーワンに数えられたこともあります。また、紅白の審査員などにも選ばれており、その人間的魅力もかつて国民的英雄であった長島茂雄や美空ひばりを抑えて、堂々のナンバーワンに輝いたというのです。

「物を作る前に人を作れ」とは、最も有名な言葉です。新聞記者から「松下電器は何を作っているのですか」と聞かれたら、「松下電器は人を創っています。あわせて製品も作っています」と答えたというエピソードは有名な話です。人間が誰よりも好きで、企業は人間の幸福のためにあると言う哲学がその根底にあります。経営哲学の中には、「素直な心」や「衆知を結集すること」の大切さ、そして、企業人が「社会的使命感に立つこと」の重要性、「ダム式経営」や「水道哲学」など、多くの名言を残しています。

特に、幸之助がいった言葉の中で、「道」や「青春」という言葉は有名になりました。かつてその言葉を机に置いて、頑張っていた短大生もいました。「自分には自分に与えられた道がある。広い時もある。せまい時もある。のぼりもあればくだりもある。思案にあまる時もある。しかし、心を定め、希望を持って歩むならば、必ず道はひらけてくる。深い喜びも、そこから生まれてくる」と。

また、有名なサムエル・ウルマンの言葉にヒントを得た「青春とは心の若さである。信念と希望にあふれ、勇気にみちて日に新たな活動をつづけるかぎり、青春は永遠にその人のものである」など、多くの人の心を打つ言葉の代表的なものです。

幼少時代から苦勞をして一代で多くの人の力を得て、まさに世界の松下幸之助といわれるほど有名になった人です。今回、資料として、「創立者と松下幸之助の共通点・相違点」を用意しました。その中で15点ほど挙げました。

第1に、「生い立ち——小さい頃から苦勞をしている」こと。第2に、どのような「転機」があったのか。第3に、「人間の可能性に注目」したこと。幸之助は、「人間は万物の王者」という言葉を使っています。また、創立者は、仏法の人間観、人間主義に立たれ行動されています。第4に、「感動の言葉」。それぞれ載せました。第5に、「誠実、謙虚な慈愛の行動」という点です。幸之助は「素直な心」を、一方、創立者は「人の振る舞い」を第一にしています。第6に、「高い思想性、哲学性」です。第7に、「対話の名人」であった。第8に、「言葉や振る舞いが人の心を打つ。心に分かる人」という点です。多くの人たちが幸之助との出会いの中で、それが人生の原点となっているというエピソードが大変多いということも共通しています。第9に、「数々の教育機関を創設し、人材教育に力を入れる」という点です。幸之助は、店員・工具養成所、晩年には、松下政経塾を開設し、人材育成に力を注いでいます。また、皆さんご存知のように、創立者は、学園、創価大学、民音、富士美術館、東洋哲学研究所などを創立しました。そして、公明党の結党ですね。第10に、「活躍」として、幸之助は経済人、社会運動家、

## 創立者と松下幸之助の共通点・相違点

No.	項目	松下	池田
1	生い立ち—小さい頃から苦労をしている	父の失敗。丁稚奉公。父の死。母の死、一人思索と誠実な行動で血の小便が出るような努力で一代で世界の松下電器を創業。	体が弱く、海苔養殖、新聞配達、長くは生きられないといわれながら徹して学びぬき、青年部時代に徹して戦い、世界の創価学会の第3代会長として日夜激闘の中で、世界広布の基盤を築く。
2	転機	若くして事業を起こし、失敗しかける。しかし、使命感に立ち天命を知る。終戦とともに財閥指定を受け、公職追放の対象に。PHP運動を開始し、事業でも危機を乗り越え、第二の創業として「産業人の使命」を発表	戸田先生との出会い。学会活動と戸田先生の下で徹した薫陶を受ける。(戸田大学)
3	人間の可能性に注目	人間は万物の王者	仏法の人間観。人間主義の語らい
4	感動の言葉	道、青春、素直な心など 「自分には自分に与えられた道がある。広い時もある。せまい時もある。のぼりもあればくだりもある。思案にあまる時もある。しかし、心を定め、希望を持って歩むならば、必ず道はひらけてくる。深い喜びも、そこから生まれてくる。」 「青春とは心の若さである。信念と希望にあふれ、勇気にみちて日に新たな活動をつづけるかぎり、青春は永遠にその人のものである。」	小説人間革命 新・人間革命 「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換を可能にする」 「戦争ほど、残酷なものはない。戦争ほど、悲惨なものはない」 「平和ほど、尊きものはない。平和ほど、幸福なものはない。平和こそ、人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない」
5	誠実、謙虚な慈愛の行動	素直な心	人の振る舞い
6	高い思想性、哲学性	「人間を創る企業」との経営理念を通して経済活動にとどまらず、国家社会への貢献	「人間のため宗教」を基盤に平和、文化、教育で世界に貢献。
7	対話の名人	聞き上手、対話で人の心を掴む	世界の識者と知性の対話
8	言葉や振る舞いが人の心を打つ 心の分かる人	幸之助との出会いが人生の原点になっているエピソード多し	世界の創価学会は一人一人を思う池田先生の行動によって作られた
9	数々の教育機関を創設し、人材教育に力を入れる	初期、店員・工員養成所。(半日教育制度)「人間を創る」企業活動。PHP 研究所を通じた社会的活動。晩年、松下政経塾を開設。人材の育成に尽力	創価学園(東京・関西)、創価大学などを創立。民音・富士美術館・東洋哲学研究所などの創立。公明党の結党。
10	活躍	経済人・社会運動家・教育者など	作家・詩人・哲学者・教育者・写真家・平和思想家
11	中国への貢献	経済交流で最初に道を拓いた日本人	日中国交正常化を提言し、交流の礎を拓いた日本人
12	主な著書	人間を考える、私の夢日本の夢 21世紀の日本(小説)、指導者の要件、人間としての成功、君に志はあるか、など多数	人間革命、新・人間革命など多数
13	晩年を戦い続ける	人間観の確立と実践・行動 松下政経塾に全力投球 中国との経済協力に自ら訪中	世界の識者との徹底した対話 第二の草創期の創価大学への激励 世界広布への指揮
14	師匠	自然そのもの、衆知	恩師戸田先生、牧口先生の心
15	社会の変革	政治、国家の改革	人間革命

教育者などであり、創業者は作家、詩人、哲学者、教育者、写真家、平和思想家であります。第11に、「中国への貢献」という点です。第12に、「主な著書」です。第13に、「晩年を戦い続ける」という点です。第14に、「師匠」。幸之助にとって師匠とは、自然そのものであり、または、衆知と捉えていました。第15に、「社会の変革」です。

幸之助の生い立ちから見ていくと、8人兄弟の末子として和歌山に生まれました。兄弟の6人が早逝し、苦勞の幼少時代を過ごされました。9歳で丁稚奉公へ行っております。それは、父の米相場での失敗が原因といわれています。母と離れ離れになる時に涙を流したようです。その後、幸之助は12歳で父を亡くし、なんと18歳で母も亡くします。

その後、幸之助は20歳で結婚。そして、22歳で独立し、松下電器製作所を創業します。幸之助は、大変な苦勞をしながら事業を拡大していきます。その時、唯一の肉親の姉も40歳ぐらいで亡くなっています。その意味では、天涯孤独な人生ということが出来ます。しかし、幸之助はこの苦しみを多くの人の力を結集して乗り越え、人間としての成功を勝ち取ったのです。創業者との人間としての共通点は数多くあります。そこにあるように、青年期の苦勞がすっかり花を開いているのです。また、三洋電機創業者の井植歳男さんは、幸之助の奥さんの弟で、当時、一緒に仕事を手伝う仲間でもありました。

幸之助の有名な言葉に、「血の小便を流す思いで」「若い時の苦勞は買ってでもしろ」とあり、それは幸之助の人生そのものです。創業者もこの話を引かれ、よく青年に話をされています。一部を紹介しますと以下のように言われています。

「小僧時代には、血の小便の出るほど苦勞した。人間、若いころから苦勞しなければモノになりませんよ。苦勞が肝心です」。松下さんの一言は、苦節を耐えぬいた経験に裏打ちされているだけに重みがある。私は、この話を、創価学会の若い世代にも何度か言い聞かせたものである。

(庶民の肌合いをもつ経済人 松下幸之助氏『心に残る人びと』より)

よく語りあった松下幸之助さんの言葉が、今でも耳朶から離れない。「池田先生、やっぱり、若いときの苦勞は、買ってでもせな、あきまへんなあ」と。今の時代は、皆、苦勞から逃げようとしている。苦勞することを、時代遅れのように思っている。また苦勞するのが損のように勘違いしている。そうではない。苦勞は全部、自分のためである。甘えようと思えば、いくらでも甘えられる。“鍛錬なき時代”である。鍛錬なきゆえに自己が崩壊し、日本という国自体が、崩壊の様相を呈してきた。こういう時代だからこそ、自分から求めて「苦勞しよう」と自覚した人が得をする。何ものにも「負けない」自分へと、鍛錬しぬいた人が勝つ。

(青年には「苦勞」こそ財産、平成7年6月28日『池田大作全集』第86巻)

幸之助氏を語るエピソードは大変に多く、また、本も数多く出ています。また、『幸之助発言集』だけで45巻もあり、いかにその一言一言に重みがあるかが分かります。

戦後、財閥指定を受け、公職追放の危機を乗り越えます。何も悪いことはしていないと、まず、PHP (Peace and Happiness through Prosperity「繁栄を通じての平和と幸福」) 運動に着手し、その後、有名な松下政経塾など、社会教育の分野でも多くの人材が育ててきました。

衆知を結集して、経営者として大成功しただけでなく、庶民の心をもち続け、多くの人の心をつかみ、感動を与え、「人間としての道」を求め抜いた人。一言でいうと、「偉大なる凡人」とは、木野さんの表現です。私は、幸之助について調べてきましたが、まさに、「人を育て、人を創る人間リーダー」と呼ぶのにふさわしい人だと思います。

創立者はまた次のようにも幸之助氏のことを語っています。

私は、松下氏にお会いするのが、いつも大きな楽しみであった。必ず学ぶところがあったからである。出会いの一つひとつに深い歴史を刻むことができた。

“立志伝中の雄”である氏は、常に誠実そのもののお人柄であった。どんなときでも、いささかも礼節を粗略にされなかった。

(今を戦うビジネスパーソンへ「ビジネスとリーダーを語る」

『ダイヤモンド セールスマネージャー』2004年5月より)

また、人柄という点では、創立者は次のように語られています。

(松下氏は、)話し上手といえれば話し上手、聞き上手といえれば聞き上手である。淡々とした言々句々のなかにも、さりげなく深く真理を語れる人である。一を聴いて十を知る人とは、この方であろう。今の日本には得難い人物であることを、私は直観した。

(『心に残る人びと』より)

また、謙虚な人物という点で、創立者は次のように語られています。

事実、私より三十も年上で、経験も豊かな松下さんが、私のような若輩者の言葉にもじっと耳を傾けてくださる。その謙虚な姿に、深く心打たれるものがあった。

人事をどうみるか。後継をどう育てるか、などの人材論で意見を求められたり、求めたりしたものであった。

(『心に残る人びと』より)

## 2. 幸之助と創立者の出会い

次に幸之助と創立者の出会いについて述べたいと思います。これにつきまして、以下の年表を参照して下さい。これは、今回克明に調べて年表としてまとめたものです。

今回、最初に申し上げておきたい事は、創立者は実に幸之助の晩年に会ったにも関わらず、なんと20回以上の出会いを重ねているという点です。おそらく記録に残っていないものを含めると、たぶん30回近くになると思います。

この年表に、丸数字で番号が打ってあります。それは、間違いなく記録に残っている、創立者と幸之助の「出会い」と考えていいかと思います。この点を秘書の方にも確認しました。そこで、私は「これだけ出会いを重ねた人は、いらっしゃったのでしょうか」とお尋ねしました。秘書の方は、「仕事上の付き合いでは、当然ありました。しかし、それ以外で、これほどの出会いを重ねられた方は、池田先生以外、おそらくいなかったでしょう」ということです。経済界と精神界のリーダーであるお二人の魂が、まさに、噛み合った歯車のような出会いだったに違いありません。

それではその出会いについて、エピソードなどを交えてお話をしてみたいと思います。どうぞ、この年表をご覧下さい。

## 年表 松下幸之助と創立者の行動

年	月日	項目	松下	年齢	池田	年齢	備考
1966(41)	11/		政経塾構想を発表したが、反対や思いとどまるようと言う声がほとんど				
1967(42)	10/15	①初めての出会い	東京文化祭に出席	72	東京文化祭に出席	39	役員の本心こもる親切な応対と素晴らしい文化祭に感動。さらに三度も伝言をされ、どこまでも人間を大事にされる池田氏の心配りに感動
	12/		PHP研究所 移転				
1968(43)	4/				創価学園開学		
	9/8				日中国交正常化提言		
1970(45)	11/12	②関西文化祭	「これから最終便で東京に参ります。」との丁寧なご挨拶	75		42	
1971(46)	2/2-8/9				C.カレルギー対談		サンケイ新聞で連載
	4/9				創価大学開学	43	
	4/28	③大石寺 桜の植樹祭(初めての語らい)					幸之助から会いたいとの申し出があり、富士宮まで駆けつける
	初冬11/17	④京都 松下茶室 真々庵	政経塾の構想	76	健康を考え、即座には賛成しなかった		最高のもてなし(前日からの準備)の上、6時間におよぶ対談
1972(47)	5/5				トインビー対談1		
	8/		「人間を考える-新しい人間観の提唱-」発表				読後感想「人間への宿題として」寄稿
	9/		日中国交回復				
	10/12				(正本堂落慶)		
1973(48)	4/11		⑤入学式に参加	77	関西創価学園開学	44	
	4/12	⑥松下電器本社訪問(門真)					ほぼ一日幸之助自ら案内
	4/19-				ヨーロッパ指導へ		
	5/15				トインビー対談2		
	8/11				ハワイ指導		
	10/	第一次オイルショック		78		45	
	11/26	⑦懇談(信濃町)	往復書簡の発案		往復書簡の発案		往復書簡始まる(松下147 池田160回答)
1974(49)	1/29		最初の質問が届く				
	1/26-				香港		
	3/7-4/13				南北アメリカ 38日間		
	5/29-6/16				第1次訪中	46	松下秘書から質問が届く
	夏				大学中心に夏期講習会		
	8/31		一応終了				
	9/5	⑧対談(聖教新聞社)					
	9/7		朝日から質問あり11日追加し25日完了				
	9/8-18				初のソビエト訪問		
	10/11	「週刊朝日」で往復書簡「生と死と愛」連載始まる		79		46	年内で終了の予定(幸之助が直談判)
	12/2-6				第2次訪中 周恩来首相・鄧小平副首相と会見		
12/10	⑨懇談		80			国内国際情勢について意見交換	
1975(50)	1/		『人間を考える』に「真の人間道を求めて」を追加し発刊				
	1/10	「週刊朝日」で「新春放談(上)」掲載 下は17日				47	
	3/20				トインビー対談 21世紀の対話 刊行		
	4/14-22		⑩見送りに空港へ		第3次訪中 鄧小平副首相と会見		
	5/8-				第2次 ソビエト訪問		
	6/24	⑪会議					
	6/27	「週刊朝日」で往復書簡「生と死と愛」連載終了					6/30 経営幹部への話の中で紹介

創価教育研究第4号

1975(50)	8/4	⑫創価大学で懇談 万葉の家	創価大学への寄付		夏期講習会にて	「日本の大学は、数は、よ うけありますが、どれだけ 『人間』を育てておるかど うか。きょうは、創価大学に 来させてもらって、非常に 清らかな電波というか、そう いう波を体感じます。心 がきれいになって、元気が 出ます。この大学で勉強 する人は幸せですな」
	10/6		⑬関西創価学園第1回 健康祭前夜祭に来学			鼓笛隊の歓迎 お誕生日 を祝う
	10/25	『人生問答』上・下巻 刊行				
	11/9		⑭創価学会の本部総 会(広島)に参加			循環型経済の話にじっと 耳を傾ける。
1976(51)	11/		『私の夢・日本の夢21 世紀の日本』出版	81		感謝御添削 池田大作先 生 12/18
1977(52)				82		
	1/31	⑮懇談 新宿区内		83		50
			政経塾構想再発表			
	5/15		廖承志中日友好協会 会長が訪問			
	8/12	日中平和友好条約 締結				
1978(53)	9/11-21		⑯見送りに空港へ		第4次訪中	「ぜひ中国へも松下先生も おいでになってください」 「必ずいつか行くつもりで す」
	9月,年末		政経塾構想を書簡で			「それはぜひ松下先生のお やりになるべき仕事です。 日本の将来を担う人材育成 のために、ぜひおやりにな ってください」
	10/28		鄧小平副総理が訪問			塾運営の不退転の決意が にじむ書面をいただく
1979(54)	4/12			84	鄧穎超女史と会見 (迎賓館)	51
	4/18		鄧穎超女史訪問			
	4/24				会長勇退	
	6/21		松下政経塾開設			
	6/25-7/4		第1次訪中			
	4/21-29		⑰見送りに空港へ	85	第5次訪中	52
1980(55)	10/12		第2次訪中			
	12/10	⑱会談 国際友好会 館 渋谷				「素直な心」と揮毫
1981(56)	8/23	⑲ハワイ SGI総会前 夜祭に参加				
	8/24	⑲ハワイ SGI総会に 参加		86		53
1982(57)	11		日本国際賞準備財団を 発足	87		54 日本ノーベル賞制定を 目指して
1983(58)	11/15	⑳会談 聖教新聞社		88		55 日本を将来をはじめ核廃 絶、平和問題、人材育成 の教育論などについて語 り合う
1984(59)	6/			89	第6次訪中	56
1988(63)	1/2		選歴に祝詞	93		60 もう一つの創価学会を作る 位の心意気で
	1/8		松下国際財団創立			国際相互理解の増進と、こ れに資する国際人の養成 を通じ、国際社会に貢献 することを趣旨として設立
1989(1)	4/27		逝去 94歳			
1993(4)	9/5		むめの夫人逝去 97歳			

参考資料 『池田大作年譜 I・II』

『関西広布史』

『心に残る人々』

『人生問答 上・下』

週刊朝日『秘められた往復書簡が語る「生と死と愛」』1974(49).10-1975(50).6



## 東京文化祭と関西文化祭

創立者と幸之助の初めての出会いは、晩年であった幸之助72歳、創立者39歳の時であり、実に33、4歳の年齢差があります。まるで親子の関係にも近い二人です。

幸之助は、創立者から東京文化祭への招待を受け、参加されたことが初めての直接の出会いといわれています。この出会いには、実は、いろいろな背景がありました。幸之助は木野さんを始め多くの方などの存在を通して、創価学会の若きリーダーである池田先生に大変に興味を持たれていたようです。わずか会長就任10年余りで、創価学会は700万世帯という巨大集団になりました。統率の取れた行動、そして、前向きな人生を生きようと喜々とされる創価学会の方々に、幸之助は文字通り「素直な心」で何かを感じ取っていたと思います。

新屋さんがこんな話をしてくれました。昭和32年ごろの話だそうですが、当時、関西では、山でマツタケが採れたそうです。新屋さんはマツタケを食べに、幸之助と何人かで行ったことがあるそうです。その時、ある意地の悪い人が新屋さんに、「君、学会員やそうやな、宗教に偏ったらあかんで」と、幸之助に聞こえるように言ったそうです。新屋さんが悔しい思いをしていると、幸之助がその人に対して、「君は何か宗教持ってるんか」と聞いたそうです。その方は、「いえ、別にありません」と。すると、幸之助は、「宗教を持っていない君がそれをいう資格はないんや」「創価学会は今、日本で一番元気で発展している団体やないか」「なぜそうになっているのか学ばなあかんで」とたしなめたそうです。新屋さんは感激したことはいうまでもありません。

また、木野さんからは、次のようなお話をお聞きしました。木野さんが社長になってからの3年間は順調に来すぎてしまい、今後のことを悩んでいたそうです。その時、木野さんは奥さんから勧められて、信仰を本気になって始められたそうです。その結果、どんどん会社が発展していったのです。その時、木野さんは幸之助に呼ばれたそうです。幸之助の部屋に入り、幸之助は、「木野君、君は僕の考えで仕事をせんと、僕以外の人の考えで仕事をしてんのか。どないやねん」と言われたそうです（笑）。木野さんはドキッとしたそうですが、思い切って聞き直り、池田先生のことや創価学会のことを20分ぐらい、必死で訴え、話し続けたそうです。その時、幸之助はじっと最後まで聞いていたそうです。最後、幸之助は何も言わないので、木野さんは、「いまや！」と思って、「失礼します」と部屋を辞してきたと言われていました（爆笑）。

このように、おそらくいろいろな人との出会いを通して、幸之助は創立者を変に注目していたようです。実は今回、松下資料館で幸之助が創立者のことを語るテープを聞かせてもらいました。その中で、次のような話がありました。（趣意）

「池田さんは本業の活動をやりながらやな、その傍らに公明党を作り、他党が振るわぬ中、国会議員から市議会まで、多くの議員を構えるようになったという素晴らしい人や」

「そんな池田さんが僕が訪問する時、10分前から玄関に立ってはるねん。何時に行くといって、20分前に待たせてもらおうと思っただと、ちゃんと玄関に立って待っていた。非常に感心した。忙しくて寸暇がないのに、『松下先生、よう来て下さいました。健康はどうですか』と、本当にいたれり尽くせりだ。外に待機している。立派な人だ」

そんなエピソードを聞くにつれ、おそらく幸之助は初めて参加した東京文化祭の素晴らしさと、創立者の人間のリーダーとしての姿勢に素直に感激されたようです。この時の幸之助の思ひについて、『人生問答』の前書の文章に記されています。

この日は、ご多忙の池田さんとは目礼を交わしたていどであったが、そのかわり、幹部の方が池田さんの意を体して「よくお越しくございました」とか「いかがですか。なにか不都合はありませんか」と3度も挨拶に来てくださった。なんでもないことのようにだが、十万近い人を集め、数千の人を招待して多忙をきわめておられるだろう池田さんが、そこまで心をくばっておられることに私は驚いた。そしてそこに、ほんとうに人を大事にし、人間尊重に徹しておられる池田さんのお心的一端を見る思いがして、非常な感動を覚えたのである。

この若さで、このまま成長されれば、将来、国の発展、人心の開発に非常に貢献し、日本の柱ともなる人だと思った。

(『人生問答』の前書)

また、創立者は、『新・人間革命』の中で、その時の様子を次のように紹介しています。

東京文化祭の出演者たちには、“生の歓喜”がみなぎっていた。人生の輝きがあり、人間の賛歌があった。それは、平和の光であった。

午後三時五十五分、絢爛たる人間絵巻は、怒涛のような大拍手と大歓声のなかに幕を閉じた。

この文化祭を通して、創価学会への深い理解と共感をもつに至った来賓も多かった。

日本を代表する実業家の松下幸之助は、後日の取材にこう答えている。

「一步会場に足を踏み入れた瞬間から興奮を覚え、荘厳佳麗な人絵や演技が進行していくにつれて、会場全体が一つの芸術作品のるつぼと化し、躍動の芸術とでもいうか、筆舌し難い美の極致という感に打たれた。これも信仰から自然にわき出る信念により、観覧者をして陶酔境に浸らしめ、自分としても得るところが大なるものがあり、感銘を深くした」

そして、やがて、彼と山本伸一との交流が始まり、後に往復書簡集『人生問答』を出版するようになるのである。

(小説『新・人間革命』第12巻「天舞」の章より)

まさに、衝撃的な出会いだったようです。

幸之助の秘書の方から聞いた話ですが、実は、東京だけでなく、甲子園で行われた第1回の関西文化祭にもお招きをいただいていたようです。幸之助は行きたかったようですが、体調が悪く、行けなかったと秘書の方からお聞きしました。

それから、2回目の出会いは、第2回関西文化祭です。この時は、言葉を直接かわされたようです。次のようにあります。

この時、松下さんは途中で静かに私の席までおいでくださり、しゃがみながら「これから最終便で東京へまいりますので……」と丁寧なあいさつをされた。東京に所用があり、時間のないなかを出席されていたのである。退席されたのは、最終の飛行便に間に合わせるためであった。

まだ松下さんと直接の触れ合いはなかったが、なにか心のなかに通じ合うものが芽生え、育っていた。

(『心に残る人びと』より)

## 初めての語らい 桜の植樹祭

次に、創立者と幸之助との初めての語らいとなった、桜の植樹祭の話に移りたいと思います。

実際に、創立者と幸之助が会い、ゆっくりと語り合われたのが大石寺での語らいでありました。桜の植樹祭で野点の席を共にしたと言われています。その後、法主になった日顕が嫉妬に

狂い、この桜をほとんど処分したのは有名な話です。残念ながら、この時に植えたこの桜は、今は跡形もないのでしょう。

この時の出会いについて、創立者は次のように語られています。

松下さんとゆっくりお会いしたのは、この時が最初である。私たちは初めて、歓談のひとつきを過ぎた。「過日の一刻は、私にとりまして、後世に残る貴重な歴史の日となると信じております」—私は、礼状に、率直な感慨をしたためた。松下さんからご丁寧なる手紙をいただいた。お手紙はすべていまだ大切に保管している。

(『心に残る人びと』より)

この時のエピソードもいろいろ聞きました。帰り際には、幸之助は元気になって、「菓はもう飲まない」「なんとしても21世紀まで生きるんだ。池田先生の言われている『生命の世紀』を自分の目で見たいんだ」と語られたそうです。

木野さんからお聞きした話ですが、「幸之助に学生時代から親しくご指導を受けましたけど帰りの2時間、あんなに口数多く話をしたのは初めてです」といわれていました。

このように、幸之助の素直な心には、創立者との出会いが一服の名画のように写ったようです。

## 京都真々庵と松下本社訪問

次の出会いは、京都真々庵に幸之助が創立者を御招待されたそうです。真々庵には、それまで旧PHP研究所があり、幸之助が人材育成に全力で取り組んできたところです。それについて、創立者は次のように語られています。

その年の初冬には、京都にある松下さんの茶室・真々庵にご招待いただいた。奥さまも同席してくださった。閑雅な庭園のたたずまいや、松下さん自らのお点前を楽しみながら、その含蓄のある言葉がうかがったことが、きのうのこのように思い出される。

(『心に残る人びと』より)

この時のエピソードも大変多いのですが、時間の関係で御紹介できないのが残念です。

ただし、有名な話として、「打ち水をいつするか」ということで、幸之助と奥さんが議論になったという話があります。御夫婦で前日から泊り込みで準備されていたようで、木野さんも当日の朝来てみたら、奥さんから遅いと怒られたとも言われていました。創立者を迎えるために「いいタイミングで打ち水をするにはどうしたらいいのか」という話し合いが、御夫婦の中で交わされたようです。これほど一人の人を大切に作る幸之助の哲学にも感動いたしました。

その後、創立者が松下電器本社を訪問された時のエピソードがあります。以下のように述べています。

後で<sup>たが</sup>厭<sup>う</sup>したことだが、松下さんは健康がかんばしくなかったのもかえりみず、私たちの見学予定コースを、事前に二度ほど自分の足で歩き、周囲の人に指示をし、自らチリを拾われた、ともうかがった。隅々までに万全の態勢で陣頭指揮し、真心をもって迎えてくださったのである。

(『心に残る人びと』より)

## 人間を考える・21世紀の日本

そして、その翌年には、幸之助はライフワークの一つである『人間を考える』という本を出版しています。これには、「人間こそ万物の王者である」との人間観をまとめて世に問うたということで、当時の日本で活躍する52人から読後感想をいただいています。その感想は届いた順番にこの本に掲載されています。私自身、この内容をまとめて、先日『人間主義と企業経営』への一考察——松下幸之助の人間観と人間哲学——という論考を書かせていただきました。この論文は、短大20周年記念の紀要に掲載の予定です。

創立者の「人間への宿題として」と題する感想が、『人間を考える』の中で2番目に掲載されています。その感想を以下のように述べています。

人間にとって、人間を考えることは、永遠にわたっての、私どもの宿題である。厳しい社会の風波と戦い、一つの山を登ってなお、筆者はこの命題に取り組んだ。本書が、現代人の、ふと自身を振り返る糸口になることを期待してやまない。

(『人間を考える』より)

私は、これを読んで、他の人がずいぶん長文を寄せているのに、わずかこれだけしか書かれていないことに疑問を持ちました。そこで、「どうしてなんですか」と伺ったところ、どうも最初は100字程度と決められていたようです。それで創立者は、それを守って書かれ、一番最初に届けられたとのことです。創立者はそれを後まで気にされていたと、松下関係の方からお伺いしました。これには、「真っ先に創立者に読んでもらいたい」との幸之助の気持ちがあったようです。

今回、一つの発見がありました。それは何かというと、その後、幸之助はライフワークの一つとして、『私の夢・日本の夢 21世紀の日本』という小説を発表するのです。この本は当初、800ページにわたる内容だったそうです。年表でいうと、昭和51年11月のところですが、それを皆に読んでもらったところ、ページ数が半分になったという本だそうです。この本のテーマは、なんと「2010年の日本」なのです。なぜかという、この本は1980年を前提に書かれており、幸之助は30年という年月を一つの変化の区切りと考えており、「2010年を目標にこうあるべき」という姿を描いたものなのです。私も読んでみましたが、残念ながら、2010年が目前に近づいてきた今、果たして、幸之助が夢に描いた日本になっているかといえ、さまざまな点で異なることが多いと思います。しかし、人間を偉大な万物の王者と信じ、その可能性にかけた幸之助の生き方こそ、今、最も見直され、評価されなければならないものであるとも考えています。

そして、発見というのは、我が創価教育研究センターが主催した「創立者著作『翻訳書籍1000冊』展」に出品されたものの中に、『私の夢・日本の夢 21世紀の日本』があり、その本の表紙の裏に幸之助が直筆で、「感謝御添削 池田大作先生」と揮毫してあったのです。私は「それはどういう意味なのでしょう。『人間を考える』と同じように、いろんな人に読んでいただいたのでしょうか」と当時関わられた方に質問しました。その質問に対して、「実際、創立者に早速読んでいただいて、いくつか添削をいただきました」と。おそらく、これは事実のようです。また、これは『人間を考える』とは違い、外部の方では創立者だけのようです。

このようなことは、多くの人の知恵を結集する幸之助の生き方の中で、創立者に対して最大の敬意と信頼を置かれていたことの一例とすることができます。

## 往復書簡と人生問答

このように語らいを重ねるにつれて、人間的にも精神的にも魅かれていったお二人が、社会や国家の問題について書簡で語り合おうということになりました。それが、今回30周年を迎えた、この往復書簡の始まりだったようです。

このいきさつについては、幸之助は次のように書いています。

それで、一度ゆっくりお話してみたいと思っていたところ、幸いその後、機会を得、以来、心の友として親しくしていただいている。いろいろ忌憚なく意見も申し上げるが、お会いするたびに啓発されるところが非常に多い。

そういうところから、お互いに問答というか、自分の疑問とすることを問い、それに答えることも有意義ではないかということになった。そして、双方150問ずつ出し合い、問いつ答えつしたもの本書である。たまたま『週刊朝日』のお勧めもあって、その適切な選定により、主として時局に関連ある約3分の1のものが同誌に連載された。同時に人間とか人生とかいった問題にふれた未掲載分についても、お読みいただければということで、池田さんとも意見の一致をみ、「人生問答」上下2巻として刊行の運びとなったものである。

（『人生問答』の前書より）

この記事が出たのが、ちょうど30年前の一昨日、10月11日ということになります。それで、今回、講演させていただいているということでもあります。

当時の状況について、『週刊朝日』に掲載した記事の第1号には、「往復書簡にかける松下老の執念」とあります。以下紹介します。

「最低、あと27年は生きようと思うてまんのや」

来月、満80歳の誕生日を迎える松下さんは、いま、本気でそう考えている。

あと27年すると、21世紀がやってくる。19世紀に生まれた松下さんは、どうやら3世紀を生き抜くつもりでいるらしい。

「池田先生とネ、このえらい仕事をするようになってから、体がすっかり丈夫になりましたん」

池田会長を知り、書簡を交わすようになったことが、21世紀をめざすはげみになったようだ。

少年時代から病弱だった。鶴のように細い体のどこからこのようなエネルギーが出てくるのか。不思議なほどの気力で、松下さんは書簡の執筆に取り組んできた。

（『週刊朝日』1974. 10. 11号より）

この往復書簡は大変な作業であったそうです。松下側にお聞きしましたところ、創立者から最初の10問が来たのは1月29日になっています。松下側はそれを読み、意味をしっかりとらえて幸之助に伝え、そして、答えを引き出していかなければならない。幸之助はもう高齢でしたから。「幸之助はコンピュータみたいな存在なので、『インプットを正確にしなくてはならない』と大変な思いをしました。また、池田先生からの質問が大変に難しいものもたくさんあって、一生懸命勉強しました」と語られていました。幸之助を困んで、PHPの研究員が必死になって創立者の質問を理解して、幸之助に伝え、そしてそれに対する返事を引き出してまとめるという作業をされていたようです。

さらに、この往復書簡が始まった頃の創立者の行動を調べてみると、1年間の内、海外へ100日以上も行かれるという大変にハードなスケジュールなのです。この時、創立者は46歳でした。

この記事にも書かれてあるように、創立者は第1次訪中をする時に、往復書簡を宿題として持って行かれています。お餞別かと思ったら質問だったと(笑)書いてあります。

お聞きした話ですが、創立者から来た回答がきちんと綴じてあったようで、松下側の原稿がクリップで止めただけのものを見た幸之助から「先生からのご回答はしっかり綴じてあるのに、こちらはそれではいかんやないか」と注意をされたといわれていました。もちろん校正の関係でそうなっていて、正式のものは綴じてお届けすると説明されたようですが、幸之助がそういう細かいところまで創立者に気を配って往復書簡は進められたようです。いずれにしても、8月末ぐらいまで、わずか半年は目の回る忙しさで、皆大変だったとお聞きしました。

このエピソードとしては、実は最初、朝日はどうも「内容を編集して、数回の連載で終えたい」と考えて進めていたようです。しかし、それを聞いた幸之助が異を唱えて、わざわざ朝日新聞社まで自ら足を運んで、「後世のために、そのまま正確に掲載してもらいたい」との要望をしたそうです。しかも、朝日新聞社の事情も当然考えられて、「もし、当初の予定を変更されて穴があくなら、私が何か書きますので」との暖かい配慮も忘れずにされており、これは幸之助らしい1コマだったと思います。

このようにして、全体の約3分の1がそのまま掲載されました。そして、この全体が『人生問答』として翌年発刊になりました。当時のベストセラーになったようです。今回、『人生問答』の内、どの項目が朝日に掲載されたのかも調べ、それを表にしました。また、どちらの質問なのかも調べてみました。『人生問答』の目次にはこの点がありませんので。

このように『人生問答』の全体を見ると、明らかにほとんどの分野はバランスが取れているのですが、2つだけ非常に異なる箇所があります。1つ目は、創立者からの質問で、「宇宙と生命と死」の分野が多く、2つ目は、幸之助からの質問で、「政治に望むこと」が多いことが分かります。

幸之助にとって、おそらく政治に最も興味を持ち、また、政経塾の構想を考えていたために、この辺りの質問が多くなったのではないかと思います。この資料を見ていただいてもわかりますように、『人生問答』では広範な分野に渡り、幅広く意見を交換されています。創立者はその前年に、トインビー対談を終えています。そして、創立者にとって、日本の経済界を代表する識者との対話の第一号が、幸之助との書簡だったのです。

どうぞ皆さん、これを活用していただいて、読んでみたいと思う箇所をもう一度お読み下さい。

『人生問答』は30年前の話のように思われる方もいると思います。しかし、『人生問答』は、世界に通用する経済界のリーダーである幸之助と、そして、今日までに170を数える名誉称号をいただくという、まさに精神界のリーダーである創立者との対話であります。

この『人生問答』は、その後の人間としての語らいを考えると、今日にも、そして100年先にも通ずる素晴らしい内容です。

今回、ビジネスエシックスという今の経営学の最先端の分野で活躍する卒業生のN君ともこの内容について話しましたが、今の課題をすべてきちんと抑えてあり、30年前に書かれたとは思えないとのことでした。

教育という点で考えると、当時、創価学園、創価大学、関西創価女子中学・高等学校を創立された創立者は、非常に示唆に富む話をされています。右側の第8章「何のための教育か」という項目だけお読みいただいても、それが理解できるのではないのでしょうか。例えば、幸之助から、私立大学の特質、創価大学の精神と実践などの質問がなされています。

『人生問答』質問事項(上巻)

質問事項				質問事項					
章	No.	[問] 松下 [答] 池田	No.	[問] 池田 [答] 松下	章	No.	[問] 松下 [答] 池田	No.	[問] 池田 [答] 松下
人間というもの	1	人間としての役割	2	人間内面の法則	繁栄への道	4	1 共同意識の醸成	2	真の繁栄とは何か
	3	人間の本質	4	人間の条件とは何か		3	人間性・国民性・時代性	4	中道について
	5	肉体と靈魂	6	唯物論と唯心論		5	すべてが共存する道	8	福祉の理念とは何か
	8	人間の欲望	7	生気論と機械論		6	この地上に棄土を	9	老人問題の根本
	9	本能について	10	欲望の種類		7	社会福祉はどこまで	12	資本主義社会の問題点
	12	知・情・意の調和	11	人間生命に内在する欲望		10	適正な競争を行なうには	17	治安の乱れの原因
	14	男女のバランス	14	残虐性と理性		11	過当競争と政治	20	余暇をどう利用するか
	15	人間は不平等か	16	人間の差別		13	自由と秩序の両立	22	人格的価値の基準
			17	超人類は出現するか		14	自由は行き過ぎか	24	新しい「恩」の考え方
			18	大脳移植の是非		15	治安とインフレの関係	28	正義と力
			19	人間尊重のために		16	治安保持の方策	30	タテ社会の人間関係
			20	“人間革命”運動の評価		18	法軽視の風潮	34	富の公平な配分
						19	消費者のあるべき姿		
						21	調和の本質		
	豊かな人生	1	運命とは何か	2		人生のコースのモデルは	23	相互不信を取り除くには	
4		真の幸福とは	3	普遍的な生き方	25	普遍的な正義はあるか			
6		女性の幸福の条件	5	何のために生きるのか	26	力の正しい行使			
10		人間としての成功とは	7	女性の特質と役割	27	平等と差別			
13		清貧が富の向上か	8	出産と育児	29	現代における大義			
15		私心を去って生きる	9	女性の職業	31	民主主義を生かすには			
16		素直な心	11	最後に悔いなき人生	32	民主主義体制について			
18		感謝の心	12	人間のモットー	33	才能と職種			
19		自然の恵み	14	苦悶の体験は	35	経営者の資格要件			
22		煩惱をどう考えるか	17	統一的な自我の持続					
23		日に新たな精神	20	個人主義と利己主義	5	1 人間の本質と宗教	2	宗教と人生の関係	
25		健康であるために	21	次の世に生まれるとしたら	3	宗派・宗団はさまざまでよい	4	宗教はどれも同じか	
27		世間をどうみるか	24	青年に期待するもの	6	宗教戦争の原因	5	平和に果たす宗教の役割	
30		若い世代に望むこと	26	信条について	8	「末法」の意味	7	世界宗教となった条件	
			28	歴史をどうみるか	10	既成宗教はあきらめられたが	9	仏教をどうみるか	
		29	中国の歴史上の人物	12	宗教と政治の在り方	11	仏教書ブームについて		
		31	青年の無関心層の増大	14	「縁なき衆生」	13	聖徳太子と仏教		
		32	影響を受けた人物	16	創価学会発展の要因	15	仏教伝来の原動力		
宇宙と生命と死	1	死をどう考えるか	2	死に臨む覚悟	17	“人類滅亡論”と仏法	18	宗教と文学・文化	
	7	安楽死を認めるか	3	死後の生命	19	「モーゼの十戒」の意味	20	倫理・道徳と宗教の違い	
	12	人肉食について	4	「肉体離脱体験」とは何か	21	道徳は実利に結びつく	22	哲学・思想・宗教の違い	
	19	人工中絶の問題点	5	死後における身体	23	善悪の判断基準	24	倫理・道徳をささえるもの	
	23	青年の自殺を防ぐには	6	転生の可能性	25	百年後の世界の思想は	26	形而上と形而下	
			8	安楽死と宗教の役割					
			9	生命の発生					
			10	進化論をどうみるか					
			11	人類の誕生					
			13	生命内奥の探求を					
			14	部分的生命と全体生命					
			15	生命現象の重層性					
			16	生体現象の不確実性					
			17	生体実験の疑問					
			18	生命の人工合成は可能か					
		20	人口問題と避妊						
		21	避妊と性道徳						
		22	試験管ベビー						
		24	自殺をどう考えるか						
		25	現代生物学発展の方向						
		26	地球外生物の存在						
		27	地球外生物との共通点						
		28	物質究極の姿						
		29	宇宙は無限か有限か						
		30	エントロピー増大の法則						
		31	エネルギー保存の法則						
		32	東洋医学の評価						

週刊朝日掲載分

『人生問答』(上) 質問数

章	タイトル	松	池	計
1	人間というもの	8	12	20
2	豊かな人生	14	18	32
3	宇宙と生命と死	5	27	32
4	繁栄への道	23	12	35
5	宗教・思想・道徳	13	13	26

『人生問答』質問事項(下巻)

質問事項			質問事項						
章	No.	[問] 松下 [答] 池田	No.	[問] 池田 [答] 松下	No.	[問] 松下 [答] 池田	No.	[問] 池田 [答] 松下	
政治に望むこと	6	1 政治の目的は何か	6	1 法治主義の倒錯	9	1 科学の進歩に欠落していたもの	2	科学の発展にもなう矛盾	
		2 政治に欠けているもの	15	2 人口と議員定数の不均衡	3	2 心の豊かさを生み出すには	4	新しい学問創造の指標	
		3 民間が政府にまかせた	25	3 日本の政党と議会	5	3 精神の荒廃を救うには	6	人間疎外の克服	
		4 国家権力と人民	27	4 刑法改正の方向	7	4 物質的豊かさの陰で	8	消費文明からの転換	
		5 権力行使の在り方	29	5 靖国法案について	9	5 心の成果を積み重ねるには	10	哲学の復興を	
		6 国民の声と政治			11	6 自然保護のために	12	水産資源の将来	
		7 政治家が尊敬されるには			13	7 資源枯渇と人類の生存	14	エネルギー資源の共同開発	
		8 総理大臣に望まれる要件			15	8 人口過疎化の防止	18	都市交通機関の開発	
		9 首相と党首の在り方			16	9 大都市の過密解消	20	核家族における人間関係	
		10 歴史上の偉大な政治家			17	10 交通戦争の終息	22	映像文化と活字文化	
		11 代議士の政治責任			19	11 親と子の関係	24	自然観の変革	
		12 若い議員が少ない理由			21	21 世代の断絶は存在するか	25	人類の危機をどう乗り切るか	
		13 政治家の出身分野			23	23 人間の幸福こそ文化の基準	26	終末観流行の原因	
		14 選挙運動の自由化			10	1 どこに発展の基礎をおくか	2	国家目標の設定	
		15 小選挙区制と選挙費用			3	3 国としての命運	6	伝統の根底にあるもの	
		16 政治資金の寄付			4	4 世界に対して担う役割	7	「恥」の意識の評価	
		17 投票率の低下と民主主義			5	5 日本民族の特質	11	憲法をどうみるか	
		18 政党の対立と強調			8	8 憲法改正の基準	13	国家防衛の考え方	
		19 議会で衆知を集めるには			9	9 改進黨の背後にあるもの	15	望ましい経済発展の方向	
		20 多党化か二大政党か			10	10 安全と生存を守る道	16	経済の危機と転換の道	
		21 派閥の弊害			12	12 自衛隊強化は必要か	18	発展途上国への経済援助	
		22 議員と政党の関係			14	14 経済復興の要因	19	アジアの反日感情	
		23 政治の生産性向上			17	17 外交・経済交流の在り方	20	国際感覚を身につけるには	
		24 裁判と世論			22	22 和の精神は日本の伝統か	21	日中友好の姿勢	
		25 困難に殉じた人をいかに祭るか			23	23 太平洋戦争と植民地解放	25	伝統をみる目	
					24	24 天皇のもつ意義			
					26	26 地方自治の強化			
	社会を見る目	7	1 物価騰貴の根本原因	2	1 インフレ抑制の施策	11	1 真の世界平和とは	3	世界平和を目指す実践
			2 物不足と買占め	4	2 商道德に反する企業	2	2 人類の平和を築く道	5	平和のための前提条件
			3 治にいて乱を忘れないために	6	3 エネルギー源の確保と開発	4	4 平和というものの姿	7	世界連邦の可能性
		4 公共事業と住民運動	9	4 住民運動をどうみるか	6	6 世界と国家の在り方	8	“世界語”は必要か	
		5 私権と公共性の対立	12	5 企業の内部告発をどう思うか	9	9 国連の効用と未来	10	武力の均衡をどうみるか	
		6 労働組合運営の基本理念	18	6 公害企業の在り方	12	12 国家防衛の在り方	11	戦略兵器制限交渉と米ソの姿勢	
		7 労使関係の在り方	20	7 公害の予測技術	13	13 文武両道の国家	15	人材をもって世界の平和に寄与	
		8 対立と調和	21	8 企業秘密の公開	14	14 “愛国心”について	17	中国の社会主義路線	
		9 人手は不足しているか	24	9 住宅・土地問題の解決	16	16 資本主義と共産主義の対立	18	毛沢東と周恩来	
		10 労働の意義、勤労の価値	25	10 抜本的な土地対策は	20	20 中東紛争解決の道	19	文化大革命について	
		11 完全雇用と労働意識	26	11 革命芸術について	24	24 平和を守る義務	21	中東民衆の平和のために	
		12 株式の大衆化	28	12 オカルト・ブームと社会			22	アジアは共通の基盤にたてるか	
		13 公害防除の費用の分担					23	アジアに共同体は可能か	
		14 税制・税率の基準							
		15 企業は諸悪の根源か							
		16 人種差別をなくすには							
何のための教育か		8	1 教育の目的	5	1 学問と実生活				
			2 義務教育の基本的理念	6	2 いかなる人間に育てるか				
			3 教育の改善すべき点	12	3 教育権の独立を				
		4 学問のための学問では	14	4 学校教育と家庭教育の関連					
		5 学問の自由・大学の自治	16	5 教育における父親の役割					
		6 創価大学の精神と実践	18	6 子供は誰のものか					
		7 私立大学の特質	21	7 性教育について					
		8 大学教育の在り方	23	8 統合の原点に“人間の学”を					
		9 学問研究を行なう体制	24	9 人間学構築への提言					
		10 教育の普及と犯罪の増加							
		11 教師の選び方							
		12 親としての責任							
	13 賞罰の必要性								
	14 歴史教育と神話								
	15 学問の専門化と総合化								

週刊朝日掲載分

章	タイトル	松	池	計
6	政治に望むこと	25	5	30
7	社会を見る目	16	12	28
8	何のための教育か	15	9	24
9	現代文明への反省	13	13	26
10	日本の進路	14	12	26
11	世界平和のために	11	13	24
上・下合計		157	146	303



お聞きした話ですが、幸之助自身、関西創価女子学園の第1期生の入学式に参加し、その後、数々の行事が催された時にも来校されています。実は、幸之助は卒業式にも参加されたそうです。その時、次のようなことがあったそうです。「失礼ですが」と、卒業生に渡す引き出物と同じものを受け取った幸之助は、翌日、店長を養成する学校の引き出物を調べるように言います。そして、幸之助はその引き出物を確認し、それが本当につまらないものだとなると、皆を叱ったそうです。私は、その叱り方が素晴らしいなと思いました。どのように言われたのかというと、「まず、気付かなかった私が悪いのだ。だから、皆もこれから気をつけてやってくれや」と。創立者の一人の生徒を大事にする心を幸之助は感じたのでした。

また、幸之助は創価大学に、その翌年の8月に訪問しています。

## 創価大学での出会い

では、資料をご覧ください。そこで、創立者は次のように語られています。

昭和五十年（一九七五年）の八月四日である。

大学の一角にある茅葺きの「万葉の家」に、遠くから、若い人たちの歌声が、夕風に乗って、かすかに聞こえてきた。

キャンパスでは、全国から高等部の代表が集まって、夏季講習会が行われていた。陽が落ちてても、なお昼間の熱気が残っていた。

その前、松下さんの到着を、鼓笛隊が演奏で歓迎した。

「よろしゅうおますなあ」

「結構ですなあ！」

相好を崩して、感嘆しきりである。

松下さんには、気取りというものがない。

「庶民の王者」というべきか。お会いして、いささかも風圧を感じさせない人徳があった。

ざっくばらんでありながら、しかも礼節の人である。

「万葉の家」でも、どんなにお勧めしても、上着を取られない。足も崩さない。

この時、八十歳である。

三十歳以上も年下の私に対し、手を膝の上に置き、背筋を伸ばして端座したまま、いつもの柔和な微笑をたたえて歓談してくださった。

鋼のように自分を鍛え上げた“見事なる人間”の姿が、そこにあった。

「日本の大学は、数は、ようけありますが、どれだけ『人間』を育てておるかどうか。きょうは、創価大学に来させてもらって、非常に清らかな電波というか、そういう波を体感じます。心がきれいになって、元気が出ます。この大学で勉強する人は幸せですな」

松下さんが言うとお世辞でなく、心から言われていると感じるのが不思議である。

（「事業は人」と説いた松下幸之助氏「世界の指導者と語る 第4部」

聖教新聞2000年7月8日より）

幸之助自身、若くして店員養成所を作り、人を育てることを企業の成功の条件として命がけで取り組み、晩年は政経塾の構想をずっと温めてきました。教育の分野でも、同じ様な思いで実践をされてきた創立者に様々なことを学びたい、と謙虚に素直に話をされているように感じるのは私だけでしょうか。

## 松下政経塾について

この政経塾は、幸之助の晩年の執念にも似た取組の一つです。

昭和41年に初めて構想を発表した時、年表にあるように、反対や思いとどまるようにという声がほとんどだったようです。それで、幸之助自身、一度挫折しそうになるのです。その後、その構想を懐で暖めながら創業者との出会いの中で、真々庵で初めてその話をされたようです。しかし、創業者はその時、幸之助の健康面で反対されます。そのことについて、創業者は次のように語られています。

「政経塾」の構想に、私は、すぐにでも賛同したかったが、一点だけ心配があった。

松下さんの健康である。

「人材の育成」——これほど命を削る仕事はない。人生最後の事業を「教育」に焦点を置かれたのは、さすが松下さんであったが、病弱の体を押して“世界の松下”を一代で築かれた労苦を思うと、私は即座には賛成しかねた。

もっと、もっと長生きしていただきたかった。

しかし、松下さんの信念は固かった。私も折れざるをえなかった。

「お心は、よくわかりました。たしかに、松下先生のおやりになるべき仕事です。日本の将来を担う人材の育成のため、ぜひおやりになってください」

私を総裁にとの、もったいないお話もいただいたが、その任ではないので丁重にお断りした。

その後も、会うたびに、熱心に塾の構想を語られた。

意見を求められ、私は、いくつかの教育機関を創設した経験から、率直にお話した。

「一期生というものは、集める側の意欲もあって、比較的いい人が集まります。したがって、『毎年、一期生をとる』決心でおやりになってはいかがでしょう。一期生を鍛え抜き、その一期生が母校に帰ってきて後輩を訓練する。そこから人材を繰り返し広げていって、良き伝統を築いていくわけです。吉田松陰の『松下村塾』も、いわば一期生しかつくっておりません」

塾の路線について、「国家」よりも“人間”を前面に主張したほうが、よろしいのではないですか」とも申し上げた。

(「世界の指導者と語る」より)

そして、創業者はまた次のように語られています。

昭和53年9月には「松下政経塾」の基本構想を発表したという書簡をいただき、その年の暮れには、塾運営にかける不退転の決意を穏やかな行文ににじませた書簡もいただいた。

(『心に残る人びと』より)

幸之助はいよいよその実現に全力を挙げ、昭和54年6月21日に開設します。幸之助はなんと84歳でした。幸之助みずから塾長となって、泊り込みで1期生の育成に当たられたようです。ただし、幸之助は晩年、喉がかすれてしまい、話がなかなか聞き取れなかったそうです。それで、秘書の方がいわば通訳をしていたそうです。しかし、創業者との懇談の場合は、「全部、分かりますよ!」と言われ、秘書の通訳なしで創業者は全て理解されておられたそうです。それほど、創業者と幸之助との心が通い合っていたのだなということが分かりました。

晩年の命を削るような政経塾での教育方式も議論と研究を中心にして、今日では政経塾出身のリーダーが数多く活躍する時代にもなりました。松下政経塾1期生の中からも幸之助氏から

直接薫陶を受け、現在、公明党・神戸市議会議員として活躍をされている吉田謙治氏（大阪大学法学部卒）がおられます。

時を同じくして、今回、創価高校、創価大学の1期生から国土交通大臣が、そして、政経塾出身の金融大臣がそれぞれ初めて誕生しました。今日、創業者と幸之助が夢にまで見た2010年を目指して、国家のため、世界のために貢献する時代を迎えています。また、短大からも女性の代表が国会議員になりました。教育にかけた幸之助と創業者との出会いが、今日、このような一つの形をつくることができたことに、私は感激で一杯です。

今、第二の草創期といわれる創価大学に、晩年の創業者はまた、命がけで人材育成に臨んでいられます。そして、先日も「もう一つの創価学会を作るぐらいの心意気」との決意を創業者自身が語られました。私もびっくりしました。実はこのことについてはこうあります。

逝去の前年（昭和六十三年＝一九八八年）には、還暦を迎えた私に、心温まる祝詞をいただいた。

「お健やかに、六十歳のお誕生日をお迎えになられ、心からお祝い申し上げます。先生には、お体も、お心も、若さに溢れておられ、とてもご還暦には思われませんが、本日ご機嫌、いよいよ真のご活躍をお始めになれる時機到来とお考えになって頂き、もうひとつ〈創価学会〉をお作りになれる位の心意気で、益々ご健勝にて、世界の平和と人類の繁栄・幸福のために、ご尽瘁とご活躍をお祈り致します」

「もう一つ創価学会を」――松下先生らしい気宇壮大なお言葉であった。

（「世界の指導者と語る」より）

今、77歳を目前にした創業者ご自身が再びこの決意に立って語られたことは、幸之助と創業者の麗しい励ましの絆そのものはないかと思えます。後継の人材である私たち創価教育に集ったメンバーが、その心意気を継いでいく事が大切なことであると思えます。

## 中国への貢献

最後に、「中国への貢献」についてお話しします。

今回、幸之助と創業者の出会いを調べていて、もう一つ気がついた点があります。それは中国への友好ということです。当時、創業者は、皆さんもご存知のように、中日国交正常化提言を行い、中国への道を第一に拓いた日本人であり、第1次から10次まで中国へ訪問します。今回、調べて分かったことですが、幸之助は創業者が第3次訪中、第4次訪中、第5次訪中と、つまり、創業者が関西から中国へ行かれる時には、必ず空港に見送りに来ていました。その時の話が次のようがありました。

昭和五十三年九月、私は四度目の中国訪問に、大阪空港から飛び立った。その折り、松下さんがわざわざ空港まで見送りに駆けつけてくださった。お疲れの様子で声もほとんど聞きとれないほどであった。

「ぜひ中国へ松下先生もおいでになってください」と申し上げた。

「必ずいつか行くつもりです」

聞きとりにくいなかにも厳とした響きが胸に残った。年齢も今では八十歳を越えられ、枯淡の味のなかに、さすがにその目や物腰には経済界の大御所らしく人を惹きつけるものがある。

（『心に残る人びと』より）

そして、その言葉どおり、その後、中国から経済への貢献と交流の話があり、なんと、幸之助は84歳で自ら中国に行きます。これは年表にあるように2回も訪中しているのです。これについて、私は調べている途中ですが、今の発展する中国ではありません。経済的にはまったくわからない当時の中国に対して「中国の経済発展のために」と、何の保証もなく、また、果たしてそれが成功するの谁也とも分からないような中、当時で100億円というお金をニューヨークからわざわざ調達して、合弁企業を設立するという意欲で取り組まれたのです。2回目の訪中の時には、幸之助自らの強い意欲で、わざわざこの調印をするために出かけています。

現在中国では、創立者は日中国交正常化を最初に提言し、中日交流の礎を切り拓いた日本人と認められています。また、幸之助は経済交流で最初に道を拓いた日本人と認められているのです。中国側が発刊した写真集に、このお二人が載っているんです。

実はこの夏、短大のゼミ生と当時、幸之助が進出したといわれる中国第1号のブラウン管工場BMCCに行ってきました。皆さんもご存知のように、SARSで大変だった工場です。幸之助が経済交流で真っ先に中国に行き、何の保証もないのに投資して作った、記念すべき工場でした。大変な苦勞をしながら、天安門事件やさまざまな事件を乗り越えて松下グループ60箇所以上となった中国進出の先駆けになってきました。SARSで大変な苦勞があったと聞いていますが、その後、行って驚いたのは、すごい発展ぶりでした。SARSの危機であったにもかかわらず、日本人スタッフは日本へ帰国せずに踏みとどまって、必死で従業員を励まし、乗り越える姿が共感をよび、今やなんと年間1000万台を超える生産体制を作るまでになったと言われていました。ここにも、まさに幸之助の精神がまさにDNAのように息づいていました。

この「中国と幸之助」も私のテーマの一つになっています。

## その他の出会い

その他の出会いとして、幸之助は、広島の本部総会に参加しています。その時、創立者は初めて、「循環型経済」という話をされ、幸之助はじっと聞かれていたというお話もお聞きしました。また、ハワイのSGI総会にもわざわざ行かれて参加されています。その時、幸之助は86歳なのです。今日は時間の関係で省略しますが、それぞれ数々のエピソードがあったようです。

以上、お二人の出会いと語らいについて何点か述べてきましたが、最後に、創立者が述べられている言葉をもって、今日の講演のまとめとしたいと思います。

経済界と、精神界と――。私たちの立場は異なる。しかし“人間・松下”の目指すところと、それにかける情熱とは、すべての指導者の胸中に高く共鳴しているといつてよいのではないだろうか。

時代が人物を生み、人物が時代をつくるとすれば、昭和が生んだ優れた経済人、松下さんには、日本のためにも、世界のためにも、さらに長寿であっていただきたい。

そして、松下さんが、学歴も問わず、家柄も問わず、一個の男子として自身の信念で偉業を成し遂げられたと同じように、これからも多くの次代を担う青年たちもまた、一人の人間として、それぞれの偉業を成し遂げゆくことを祈ってやまない。その先達の一人が松下さんであると思うからだ。

（『心に残る人びと』より）

このように、晩年を「人間教育」に、「アジア」に、「人間観の確立」にと全力で駆け抜けた松下幸之助の人生。そして今、晩年、創価教育を中心に青年の人材育成に全力を尽くし、未来

を作る創立者池田先生。ともに、人間のリーダーとしての生き方・輝きは今もなお、共鳴し続けています。人間にとって、「人生をどう総仕上げするか」という課題にも、このお二人の生き方を手本として考えることができるのではないのでしょうか。

私も創立者の元で学び、人生を生き抜いた一人として、これから自分自身のライフワークに全力で挑戦することをお誓いし、本日の講演とさせていただきます。ご静聴、大変にありがとうございました（大拍手）。

（本稿は2004年10月13日の講演に加筆・訂正したものです。）